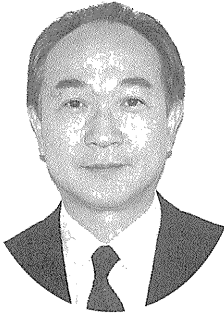


ずいそう



世紀を超えて

奥寺正英

私が勤める会社は札幌市西北部の手稲区にあります。背後にはスキー場で知られる手稲山があり、前方には平野部が石狩湾へと広がっております。

札幌に住まいを移してこの会社で仕事をするようになってから、四度目の春を迎えました。私が春を実感出来るのは、近郊の山々の残雪が消え暖かな日差しと共に桜の花が咲きだす五月の連休の頃であります。氷雪と厳しい寒さが続いた長い冬の後だけに、爽やかな風に吹かれて満開の花を眺めていると、言い様の無い開放感に浸ることが出来ます。

かく言う私は函館で生れ、中学生の頃までその町で育った後、家の都合で東京へ移り住みました。その時から50年近くの歳月が流れました。大学を卒業して前の会社に入ってから、仕事の関係で関西、四国そしてアメリカでの暮らしを経験してきましたが、疎遠となったここ北海道で再び暮らすことになるとは全く予想もしておりませんでした。

それが2年前に「ある事」が判った時、私がこの札幌に来て暮らしていることに、何か因縁めいた関わりがあるような想いとらわれたのです。それは或る休日のことでした。ふらりと札幌市資料館に立ち寄り、札幌の歴史に関する展示資料を読み進んでいたら、偶然私の祖父（文久3年生れ）の名前が目にとまったのです。

「祖父の代に北海道に移住して来た」と父（明治20年生れ）が子供の頃の私に話してくれたことを記憶しております。その父は私が11歳の時他界したため、詳しい話は聞けず仕舞いになっていました。また、悪いことに幾度にも及ぶ函館の大火で被災し、当時の古い記録の類も残っておらず、移住の頃の詳しい事柄は判らなかつたのです。

資料館での発見を糸口に、休日の図書館通いがしばらく続きました。そして移住の経緯、入植地の正確な場所などの解明に役立つ様々な記録に辿り着きました。

幼少で家督を継いだ祖父は、仙台藩の支藩である白石藩家臣団六百余名とともに明治4（1871）年石狩国札幌郡に移住して来ました。烏羽伏見の戦いに始まる戊辰戦争で新政府に敗

れ、無禄となった家臣たちは武士身分を維持できる開拓使貫属への編入に応じ、集団で札幌に移住し開拓にあたる道を選んだのです。

明治4年9月、一行は2隻の船（うち1隻は歴史上有名な咸臨丸で、航行途中上磯郡沿岸で破船）で松島湾を出帆し、函館を経由して小樽で上陸したのち陸路石狩の町に到着しました。仮小屋を構え雨露を凌ぎ石狩で年を越して、白石と手稲の両村に入植したのです（祖父は明治の中頃以降に入植地の手稲を離れ函館に移り住みました）。

札幌市の人口は今では180万人を超えております。明治2（1869）年に開拓使が置かれて市の創建が始まり、以後北海道の中心として急発展してきました。多くのビルや発達した道路網を持ちながら、余裕を感じさせる整然とした町並みと豊かな大自然に恵まれて、この町は観光客をはじめ訪れる人達の心を惹きつけております。真夏でも蒸し暑さはなく、春から秋にかけての季節は快適に過ごすことが出来ます。では冬はどうでしょうか。札幌市ではひと冬に降る雪の量は、年平均値で約5メートル、また12、1、2月の各月の平均気温は摂氏零度以下です。この様に冬の自然環境は厳しいのですが、市内の車道の除雪率は93%を越え、多少の不便さはあるものの、日常の交通事情で特に困ることはありません。また各家庭の暖房施設は完備されており、真冬でも部屋の中ではシャツだけという生活スタイルが当たり前になっております。

今でこそこの様に一年を通して快適な日常生活が可能となっておりますが、私の祖父が入植した頃の生活は過酷なものであった様です。入植地では各戸に開墾地1万2千坪が賦与されましたが、開拓の事情を伝える記録には、瘠土ながら人跡未踏の樹林を朝夕、寒暑に耐えて伐り開き、野生の鹿や狐、ときには罽と戦いながら農耕に励んだとあります。

私の車通勤ルートの途中に、かつて祖父たち移住者が住み開拓を行った地域を貫いている当時の幹線道路があります。会社の行き返りには必ず通るところですが、今ではすっかり市街化されてビルや商店などが建ち並び、明治維新の激動の荒波に飲み込まれて生きた人々の様々な人生ドラマを窺い知れるものは何一つありません。

広大な大地と恵まれた環境のもと、北海道はこれからも発展する可能性を秘めていると言えましょう。開拓時の先人たちの労苦と努力を身近に感じられる様になって、私もこの地で頑張らねばと自分を奮い立たせるようにしております。